

新時代の国際交流と学生たち

先川 信一郎*

(受領日：2016年5月9日)

高知工科大学 国際交流センター
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

要約：世界の中で日本の大学の立ち位置を考える時、米国、欧州、豪州や他のアジア諸国とは、グローバル化のスピードがやや遅いことに気付く。それは、英語という「壁」をどう乗り越えるのかという課題とも密接に関連する。グローバル化には、まず学生が英語というツールを使いこなすことが必要であり、そこから世界の大学や研究所との研究交流や異文化理解が始まる。本学は、各国から博士課程への優秀な留学生を獲得するとともに、協定校への留学やタイ・シンガポール研修、パジュ英語村研修、YOSAKOI サマースクールなど、各種の海外プログラムを通じて学生たちのモチベーションを高め、グローバルに活躍できる人材を輩出する努力を続けてきた。「はっきりと違いのある大学」「人が育つ大学」として、本学らしいThink Global, Go Globalをどう具体化していくか、新時代に沿った戦略を紹介する。

1. はじめに

本学のグローバル化の基本戦略は①研究による国際的プレゼンスの向上②教育におけるグローバル（国際交流）プログラムの充実③地域のグローバル化への貢献④キャンパスのグローバル化を4つの柱としてきた（2014年度大学紀要「KUTの国際交流とグローバル戦略化戦略」参照）。2017年は創立20周年を迎える節目の年となるが、その歩みとともに学生たちのレベルが年々向上し、グローバル化に対する意識に変化がみられるようになったのは喜ばしい傾向だ。特に最近は、「自分の英語力を向上させて海外に留学したい」、「海外で働くことにチャレンジしたい」といった相談を学生たちから受けることが多くなった。これは、時代の流れもあるが、ジョン万次郎プログラムを軸とした多彩な国際交流プログラムがきっかけとなり、本学全体の雰囲気を変えつつあるからだと思われる。

2. チャレンジが自信に

2.1 タイ・シンガポール研修とPBL

4年目を迎えた2015年度のタイ・シンガポール研修は、参加学生を前年度の16人から21人（男子9人、女子12人）に増やし、2016年2月28日から3

月9日まで実施した。学生の意欲やTOEICの点数、コミュニケーション能力を加味した学内選考の末、1年生13人（うち女子8人）、2年生8人（同4人）が参加することになった。また、今回は学生同士の交流をさらに一歩進め、異文化の中でともに考えるPBL（Project Based Learning）を初めて取り入れた点に大きな特徴がある。これは「課題解決型学習」と呼ばれ、講義形式の教育とは一線を画すものだ。

PBLは、次々と直面する新しい問題に、従来の教育体系では対応できなくなったため、1970年代に米国の医学教育で開発された手法である。近年の科学技術の進歩に対し、講義や実験、演習を重ねても未知の分野や学際的な問題を解決できないケースがみられるようになったからであろう。

PBLにチャレンジすることで、具体的な課題を設定した学生たちが、それを解決するという目標に向かって知恵を出し合い、自らの考えを伝え、チームの一員として意欲的に取り組むことが狙いだ。学生たちはこの体験を通じ、実践的な力、つまり課題解決能力やプレゼンテーション能力、論理的思考力、モデリング能力、デザイン力を、ある程度身に付けたのではないだろうか。

ただ、本学の学生たちにとっては初めての体験



PBLに取り組むタイと本学の学生たち



発表内容がまとる思わず笑顔に

ということもあり、協定校の中でもPBLで実績のあるタイのキングモンクット工科大学トンブリ校(KMUTT)の学生たちと連携することにした。3月3日に訪れたKMUTTでは、本学とタイの学生が7人編成で5チームをつくり、まずはディスカッションとアイデアの交換で、課題を設定することから始めた。

「解決方法が知られていない答えを自分たちで発見する」。この取り組みには、学生たちも大いに興味を持ち、チームごとにフレームワークの設定から、実施計画立案、プロジェクトの実行に取り組んだ。

今回、各チームが選んだ課題は「トイレ(清潔さ)の比較」「モーターサイクル(交通渋滞)」「指紋認証による列車利用法」「日本人の働き方(上下関係の意識)」「バンコクで迷子になったら」。3日間でパワーポイントを制作し、直前まで英語によるプレゼンテーションの練習を重ねた。

大西臣禎君(システム工学2年)は、「PBLでは、KUMTTの学生が英語を非常によく話すので自分の未熟さに気付かされ、英語学習への意欲がより一層増した。PBLで深く考え、議論したからこそお互いのよさに気づくことができた」と感想を語り、福田理沙さん(環境理工2年)は、「英語で言いたいアイデアがまだまだあったのに、言えなかったのが悔しい。とても楽しかったので、3日間では足りなかった」と、振り返っていた。

全員が発表に参加したプレゼンテーションは、学生投票、教職員それぞれの投票で「バンコクで迷子になったら(Getting Lost in Bankok)」のテーマが、アイデアが具体的で面白いと、最優秀に選ばれた。これは、バンコク市内のバス停に自分の位置がわかる地図を置くことや、携帯で迷子のアプリの開発を具体的に提案した内容で、すぐに実用化すべきだと

の声もあった。

このチームのメンバーだった堀雅世さん(環境理工2年)が、次のように報告してくれたので紹介しよう。

初めは、PBLの趣旨をタイ学生と共有することからであった。また課題を見つけるにおいてもそれぞれ意見を出した。文化や言語の違い、チャオブラヤー川の汚染問題など。そこからタイでは街中に地図が少ないため旅行客が道に迷いやすく、言語も異なるため目的地を探すことが難しいという点に目をつけた。私たちの課題は「Getting Lost in Bangkok」となった。

その後、考えてきた解決策を共有した。①道に迷っていると分かる世界共通のマークを作る②現在地を中心とした地図を作る③タイにはバス停が多いが行き先を書いていないため、分かりやすく行き先を示す④スマホを使用しオフラインでも使える地図アプリを作る⑤案内センターが少ないため新しく作るなど。ここから案をまとめた。

解決策も様々な案が飛び交うとてもよい関係を築くことができた。これらよりPPT構成と課題提示では役割分担を決めた①導入部分はMr. Sirada Saengsaeng②タイでは道に迷いやすいことを説明するのはMr. Wisawa Chatwantakawanich③解決策としてGetting Lost Signと、それをタクシーに見せると案内センターへ連れていくことの説明(人に助けてもらう)は岡田啓汰君(環境理工1年)④GL applicationとGL signをバス停に貼り、そこにQRコードを読み取るだけでオフラインでも現在位置が分かるようにする説明は、松根愛さん(情報1年)⑤バス停に行き先を示したGL mapを貼り分かりやすくする。また紙状のGL mapもバス停に備え付け、旅行客がスマホをもっていなくても分かるようにする説明については、堀と小林健輔君(システム工学



最優秀に選ばれた「迷子になったら」のPBL



タイの各大学では自慢よさこい踊りを披露



データを盛り込んだ「モーターサイクル」



チュラロンコ大学の研究室も雰囲気は同じ

2年)が行った。帰国後 KMUTT の学生が、私たちが発表した Getting Lost in Bangkok を、実際にタイで実現したいとネットを通じての署名サイトを創設してくれていた。

最優秀は逃したものの、「モーターサイクル」は、いかにバンコク市内でのモーターサイクルによる事故が多く、その原因が主にスピード違反であること、さらに運転者のマナーの改善が必要であることを具体的なデータや図表で示した。「トイレ」は日本とタイでは、トイレに対する概念が異なること、清潔さに対する考えの違いなどを浮き彫りにした興味深い内容だった。学生たちは、それぞれの課題について図書館やインターネットで調べ、実際にバンコク市内で調査を行ったチームもいた。さらにタイ人学生たちと何度もディスカッションを重ねたことで、コミュニケーション能力にある程度の自信がついたようだ。

大半の学生たちは、タイ・シンガポール研修の全体を通じて「PBL が最もためになった」と語っており、タイの学生たちと英語で話すことへの抵抗感が減ったことは間違いない。国籍や民族、宗教が違っ

ても、同世代の若者同士はすぐに打ち解けられることを実感したようだ。さらに KMUTT のアカデミックな雰囲気が気に入って8月からの留学を決め、英語の猛勉強を始めた男子学生がいることも朗報である。

このほか研修では、バンコクに到着した初日の2月29日と翌日、泰日工業大学(TNI)でオリエンテーションやキャンパスツアー、研究室見学を行った。この後、文化交流としてまず本学の学生たちが KUT や高知県、日本文化について紹介。タイの踊りやタイボクシング、伝統楽器の演奏などをタイ人学生たちから学んだ後、その成果を発表した。

3月2日はタイのトップの名門チュラロンコン大学を訪問し、「Asian Economic Community」についてウィット博士から特別講義を受けた。ここで東南アジア諸国連合(ASEAN)10カ国が、一体となって教育面、経済面で連携を強めていることを実感したようだ。午後からはパディとともに王宮をはじめワットプラケオ、ワットポーを見学し、タイの仏教文化に触れた。

この後、6日にタイからシンガポール入りした学生たちは、市内観光の後7日にシンガポール科学技



イギリスの村を再現したパジュ英語村



朝から晩まで英語漬けの学生たち

術研究所（A*STAR）と、そのショールームである Fusion World を訪問。バイオテクノロジーを駆使したジカ熱の研究の成果や、脳波を使ったゲーム、情報通信、人材交流、共同研究の様子を見学した。ここでは、世界中から第一線の研究者が集まり、人類が直面するさまざまな課題に挑戦していることに、刺激を受けたようだ。

2.2 English Boot Camp

タイ・シンガポール研修とは別に、本学では初の試みとして、韓国パジュの英語村に2月21日から28日まで、修士3人を含む合計16人（うち女子8人）の学生たちを派遣した。中級以上の英語力を持つ学生たちに、さらに実践的な体験をしてもらい、英語力に磨きをかけようというのが目的だ。短期間とはいえ、朝から晩まで、キャンプで英語漬けにされ、英語力を鍛えられることから「English Boot Camp」とも呼ばれるようになった。

韓国は英語教育を小学校3年生から導入しており、高校卒業時のTOEICの平均点数は約700点といわれる。韓国の大学もTOEICで650点以上を取らないと、卒業できないところが多い。まさに英語教育の先進国であり、韓国・京畿道が2006年に建設した公立のパジュ村は、海外留学をしなくても、ここで英語圏と同じ教育を受けることができるという理想的な環境だ。東京ドーム6個分の広大な敷地は、英国南部のRye村と同じ作りで、ネイティブの外国人講師が常駐し、教室から学生寮、カフェテリア、マーケットまで英語を使わざるを得ない仕組みとなっていた。出入国事務所やコンサートホール、体育館、市庁舎があり、小学生3年から大学生、ビジネスマンまでが学んでいる。しかも低コストである。

現地に行ってわかったことだが、もともとパジュ

はソウル防衛のための軍事都市で、北朝鮮国境に驚くほど近い。滔々と流れるイムジン川までは、車でわずか10分。高台の統一展望台を訪れると、そこからは、北朝鮮側の村や広場、農地、住居が一望できた。ここには中国人や日本人観光客が、休戦ラインを見ようとソウルからやって来る。私たちが訪れた時はまだ真冬で、マイナス5～9度の寒さだった。

本学の学生たちは、昼食をはさんで毎日午前9時から午後4時まで英語の授業を受けた。そのカリキュラムの特色は、とにかく楽しみながら英語を学ぶ点にある。内容はレベルに応じ、英語によるプレゼンテーションの基礎をはじめ、コミュニケーション・スキル、イディオム、ストーリー作り、さらに警察署や病院でのやり取りまでと多彩だ。実際に敷地内には授業を行うための警察署や病院、キッチンといった舞台装置まであった。ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）に似た雰囲気、観光スポットにもなっている。

実際に授業をのぞいてみると、英国やカナダ、南アフリカ国籍の外国人講師は、非常にきれいなイギリス英語を話し、外国人に英語を教えることに長けたプロ集団だった。学生たちが理解するまで何度も何度も終始にこやかに話かける姿が印象的だった。学生たちは授業が終わり、夕食後は自由時間であるにもかかわらず、最終日のプレゼンテーションに備え、全員が消灯時間の午後10時まで自習室で切磋琢磨しながら英語学習に取り組んでいた。

ただ、本学の学生が訪れたこの時期は、韓国の冬休みだったため、韓国人学生はほとんどいなかった。代わりにパジュ村に勤務する韓国人青年3人が、授業に参加してくれた。松丸剛君（システム工学2年）は、「これまで中学校から英語を学んできたが、実際に英語を使う機会がなかったため、英語を勉強しようというモチベーションが低かった。しかし、

パジュ英語キャンプを体験してからは、自分の前にチャンスが広がっていることを実感し、が然やる気が出て来た」と語っていた。スペインのバレンシア工科大学への留学を控えた西田真綺さん（環境理工3年）は「TOEICが800点以上ないと、留学してもついていけない。今は毎日の積み重ねで実力をアップさせるしかない。がんばります」と決意を述べていた。

パジュ英語村の研修が、学生たちにとって非常に有益だったことから、本学の国際交流センターは、第2陣の学生グループを、8月下旬にパジュ英語村に派遣することを決めた。まずは英語をしゃべることへの抵抗感をなくし、ヒアリングに慣れることである。やってみれば、意外に楽しく、乗り越える壁は低いということを、ぜひ多くの学生に認識してほしいと願っている。

なお、タイ・シンガポール研修と、パジュ英語村の報告会が3月10日、香美と永国寺キャンパスをオンラインで結んで、英語によるプレゼンテーションで行われた。そこで参加学生たちが伝えた「Be brave. Don't be shy」というメッセージは、多くの学生たちの心に響いたのではないだろうか。

2.3 YOSAKOI サマースクール

恒例の2015年度のYOSAKOIサマースクールは、科学技術振興機構の日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）の支援を受けて2015年8月3日から12日まで、10日間の日程で行われた。海外の協定校から中国の昆明理工大学、韓国の慶南科学技術大学校、台湾の国立虎尾科学技术大学管理学院、タイのチュラロンコン大学工学部、ミャンマーのヤンゴン大学、モンゴルのモンゴル科学技術大学土木・建築学部、スリランカのモラトワ大学から各2人、合計14人を招き、本学の学生19人がバディとして参加した。

YOSAKOIサマースクールは、日本にいながら海外の学生と積極的に交流することで、コミュニケーション能力を高め、異文化を理解することが狙いである。また、全国的にも有名な高知のよさこい祭りに国際隊として参加し、日本の祭り文化への理解を深めてもらおうという試みだ。まず、International Houseに泊まった海外からの学生たちは、オリエンテーション、ウェルカムランチの後、キャンパスツアー、研究室見学などを行った。このほか、エネルギーや土木工学、環境科学、地域連携、日本文化などの講義をバディとともに受けた。海外からの学生たちは、ほとんどが初めての日本で、高知の豊かな



よさこいを踊れば笑顔がこぼれる

自然や清潔感のある暮らしぶりがエキゾチックに映ったようだ。

韓国のキム・デワン君は「日本人って、こんなに親しみやすいとは思わなかった。母国で思っていたイメージとは全く違う。高知に来て、日本と日本人に対する考えが変わった」と語り、スリランカのパラビーン・マスマガゲ君は「日本文化と日本食が大好きになった。自然がすばらしい。ぜひまた、来たい」と笑顔を見せていた。

一方の日本人学生は、「初めて海外の友人ができた。とにかく家族や大学や日本文化のことを語り合ったことが楽しかった」「海外からの学生と話したおかげで、視野が広がった。もっと英語が話せるようになりたいと思った。海外の友達とは、これからも連絡を取りたい」といった感想が多かった。

YOSAKOIサマースクールのハイライトは8月11日午後、国際隊としておそろいの赤いはっぴ姿でよさこい祭りで踊ったことだろう。踊りの事前練習は3日間と短かったが、炎天下で汗だくになりながら高知市内の各地で踊ったことは、最高の思い出になったようだ。

参加学生は、いずれも英語力、コミュニケーション能力、異文化理解力の向上を目指す本学の「ジョン万次郎プログラム」に登録しており、タイ・シンガポール研修や、韓国パジュ英語キャンプにも参加する学生が目立つようになった。これは、YOSAKOIサマースクール（初心者向け）、タイ・シンガポール研修（中級者向け）、パジュ英語村研修（上級者向け）、といった具合に、国際交流プログラムが有



すっかり仲良しになった参加学生たち

機能的に機能しているからだろう。

もちろん、2016年8月も同様のYOSAKOIサマースクールを企画している。今回は近い将来の大学間協定や、優秀なSSP生獲得を念頭に、中国の清華大学、台湾の台湾国立大学、韓国のソウル国立大学、スイスのスイス連邦工科大学ローザンヌ校（EPFL）、オーストラリアの西シドニー大学、タイのチュラロンコン大学、インドネシアのバンドン工科大学と、世界でもトップクラスの大学から学生各2人、合計14人を招聘する。これは、本学のグローバル化戦略を一段と強化することにつながるであろう。また、本学の学生がアジア各地の大学のサマースクールに参加する機会が増えてきたのもよい傾向だ。これらの学生たちには、「海外の若者が一番知りたいのは日本文化や歴史、日本社会や日本人の考え方だから、それをきちんと説明できる準備をしておくこと」といったアドバイスをしている。

2.4 E-Square

ところで、本学の学生たちから「どうやって英語を勉強すればいいのですか」「留学するにはどの程度の英語力が必要でしょう」「トビタテ!留学JAPANに応募したい」といった問い合わせを受けることが多くなった。そこで教育センター、共通教育教室、IRCで協議を重ね、学生が主体的に学習できる「E-Square」を2016年度から新設した。これは、自由な発想で英語の課外学習や国際交流を深めていくことを支援する共同学習スペースだ。学生たちの英語力のパワーアップにつながれば、という期待感もある。

その機能は①英語に特化したアクティブ・ラーニングとグループ研究②English Lunchや映画上映

会、テーマ別チャットなどの英語使用機会の創設③英語のプレゼンテーション指導や論文作成などのライティングセンター④英語学習方法や資格試験相談などの英語コンサルティング⑤海外留学や英語雑誌、パンフレットなどの情報提供などだ。パソコンが6台備えてあり、オンラインでもビデオ学習ができる仕組みとなっている。

さらに、英語科教員とIRCが連携してオフィスアワーを設け、E-Squareには日替わりで教員が一定時間常駐し、訪れた学生たちの相談に応じることにした。イメージとしては、学習室というより、だれでも気軽に立ち寄れるラウンジのような場を目指しているが、まだ試行錯誤の段階だ。これまでのところ、連日数人が訪れているが、ここに海外からの留学生が息抜きに訪れ、日本人学生と交流したり、ハリウッド映画を鑑賞するようになればさらによい雰囲気になるはずだ。また、経済・マネジメント学群には、留学希望者が多いことから、香美キャンパスだけでなく、永国寺キャンパスにも同様のE-Squareを設けることが必要だろう。

このほか、学生の英語力を高め、それを継続的に把握する方法として、2017年度からCASEC（Computerized Assessment System for English Communication=インターネットを利用した個人適応型英語コミュニケーション能力テスト）を導入し、1年生から3年生まで、全員が受験する仕組みを検討中だ。これは、パソコンを使用するため、テスト終了後すぐに点数が表示され、履歴が保存できることから、モチベーションが上がると思われる。国内では、150以上の大学で導入されている。今後は、すでに実施されているTOEIC-IPとの効率的な使い分けについても考えていきたい。

これに関連し、「英語プレゼンテーションに強い大学」として、コンテストでの受賞を続け、本学の広報効果をあげることを視野に入れている。これは2300人規模の大学だからこそ可能である。学生にとっては、プレゼンテーションで培われた「ハートの強さ」が財産になる。さらに、学生たちの国際学会での研究発表や、研究留学を奨励していくほか、TEDxの開催もぜひ実現したいところだ。

一方、E-Squareと似たような場として、国際交流会館（IHouse）の1階スペースやラウンジを、日本人学生と外国人留学生の交流にさらに活用したいと思っている。SSP生の歓送迎会やタイ、中国などの旧正月パーティーなどが催されているが、他大学の留学生や地元の人たちを招くなど、まだ工夫の余地がある。

3. 終わりに

世界の教育、研究界をリードしてきたのは米国だが、ここ数年は、EU 諸国を筆頭にオーストラリア、ニュージーランド、中国、台湾、韓国、インド、タイ、シンガポール、インドネシア、マレーシアの各大学が、グローバル化を加速させている。中東諸国では、アラブ首長国連邦（UAE）が、米ニューヨーク大学（NYU）や仏ソルボンヌ大学、ロンドン・ビジネススクールなどの名門大学の現地校を 40 校もオープンさせた。UAE は、莫大なオイルマネーにものをいわせ、金融、貿易だけでなく、高等教育でも世界のハブになろうとしているようだ。中国には、米デューク大学など 18 校が進出している。

私は、欧州でもレベルの高いエストニアのタリン工科大学、ラトビアのリガ工科大学、リトアニアのヴィリユニス・ゲディミナス工科大学を、5 月に訪問する機会があったが、EU は経済圏というだけでなく、教育分野でも連合を組み、学生の流動性が極めて高い。

かつて旧ソ連に組み込まれていたバルト 3 国は、今や EU 加盟国というアドバンテージを生かし、エラスムス計画（The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students: ERASMUS）によって科学・技術分野における協定や大学間交流を促進。国家の枠にこだわらない「ヨーロッパ大学間ネットワーク」を構築している。本学も EU をはじめ中国、台湾、タイ、インドネシア、オーストラリアの大学と積極的に交流を進め、高い研究能力、英語力を持つ日本人学生をもっと送り込むことで、世界に通用するグローバル人材を育てたいと考えている。

The New Horizon of Globalization and KUT Students

Shinichiro Sakikawa*

(Received: May 9th, 2016)

International Relations Center, Kochi University of Technology (KUT)
185 Miya no Kuchi, Tosayamadacho, Kami, Kochi, 782-8502, JAPAN

* E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

Abstract: When we think about Japanese universities' current status in the world, we notice the pace of globalization is somewhat slow compared to that of universities in the United States, Europe, China, Australia and other ASEAN universities. This may be closely related to the often-stated goal of overcoming the English language barrier. In order to be globalized, Japanese students are first required to master English at least to some extent, and only then can the research exchange and cross-cultural understanding begin. To this end, the KUT Special Scholarship Program (SSP) was started in 2003 to promote excellence in research by inviting doctoral students with high potential from around the world to make dynamic contributions in a variety of academic fields at KUT. In addition, the Thailand-Singapore Study Tour, the Paju English Village Camp in South Korea, the YOSAKOI Summer School, the John Manjiro Program, and the construction of the International House dormitory for foreign and Japanese students all contribute toward establishing an ideal environment to increase students awareness of, and motivation to become global citizens. KUT sees itself as " the university for fulfilling one 's self potential ", and as we head toward a new horizon of the globalization, we renew our resolve to foster truly global individuals who can make a significant contribution in the new global society.